

手をつなく

田中 三保子

保育の中で何気なく、あるいは意識的に子どもと手をつなぐことはよくある。身体の表面積からみれば僅かな手と手の触れ合いが、気持ちを伝えあう大事な手段となることを実例を通して考えてみようと思う。

M子は三歳児で入園してきた。母親とは抵抗なく離れたが、初めは緊張した表情をしていた。私のそばに寄ってくるでもなく、へやのまん中あたりに一人で黙って立っていることが多かった。

私は慣れない子どもや要求の強い子、あちこち動きまわる子などの対応に追われていて、それでも時々声をかけてみるが、返事は得られないでいた。今はまだ緊張しているから声が出せないけれど、慣れてくれば自然に話せるようになるものと、私はそのことをあまり気にもとめないでいた。

けれども二週間経っても三週間経っても、M子の口からは一言も聞くことはできなかった。どうしてしゃべらないのだろうか、私はかなり気になり始めていた。

M子の母親はいつも年子の弟を二人連れて登園してき

ていた。一人を抱いて、一人の手を引いているので、M子までは手がまわらないようであった。その様子から、M子は本当は母親に甘えたいのを我慢してきたことが察せられた。けれども、そのことと幼稚園でしゃべらないこととがどう結びつくのか、M子の園での様子からはよく分からなかった。

もしM子が家で自分を抑える生活をしているのであれば、せめて幼稚園ではM子の気持ちそのままが出せるようにしてあげたい。自分からは何の要求もしてこないで、私の方で気を配ってM子の気持ちを汲みとるよう心がけた。騒がしいのと、男の子は好まないらしく、そばに近づかないが遠まきには様子をながめている。特に何か作ったり描いたりしているのには関心があるらしく、じっと見ている。机の周りに人が少なくなつて静かになると、椅子に腰かける。紙が欲しいのとたずねると、小さくうなずく。紙を渡すと、ほかの子どもたちもやっていたことを自分なりにやってみている。それも、似たようなことを納得するまで毎日繰り返してやっ

てきたものは大事そうに持ち帰った。

素振りと目の表情から、だんだんとM子の気持ちが読みとれるようになってきた頃には、頼みたいことがあるとM子の方から傍らにきてくれるようになった。私の周りにいる子どもたちを避けるように、距離をおいてついてきたり、背後で待っているだけなので、それと気がつかないこともあり、そんなときにも私が気づくまで辛抱強く待っていたようだった。

一学期末の母親との話し合いで、母親が家で仕事をしていることがわかった。M子は家ではほとんど遊びらしい遊びをせず、弟たちの世話をして過ごしているらしい。"そういう生活でも特別不満があるようには見えません。たまに手が空いてつないであげようとしても、きょうは先生につないでもらったからいいのと言います。家では幼稚園のことを色々話してくれます。自分の遊びができて嬉しいようです。"と母親は話ってくれた。

一学期の間、M子は確かに、園で不満を解消するため

と思える行動は全くしなかつたし、控え目ではあるがそれなりに楽しんでるようにみえた。幼稚園で必要以上に無理をしているともみえないのに、どうしてしゃべらないのであろうか。M子の心の中に何か乗り越えがたい壁があつて、そのために、言いたいことはあるのに言葉として発することができないように思われる。M子はその壁を自分で乗り越えられるようになるまで、気長に気持ちについていこうと思つた。

二学期になつても、M子の様子は余り変わったようには見えなかつた。

十月になつて、教育実習の二期が始まつた。M子は私のそばに寄らなくなり、実習生について歩くようになった。忙しそうに動きまわっている私よりたくさん相手をしてもらえると分かつてのことであろう。時々手をつないでもらっている姿は満足げに見える。

そして、ふざけだしたのである。舌を出してドアをべろりとなめたのが始まりだつた。そうなるといつても目だけではしか表情の読み取れなかつたM子の顔が崩れ、にや

にやして止まらなくなつた。机をなめる。椅子をそーっと引き出し、そーっと倒す。反応を確かめるようにちらちらと私に視線を走らせるが、ゆるんだその表情には晴やかささえ感じられた。M子は自分で壁を壊そうとしている。私はただ黙つて見ているしかなかつた。

教育実習が終わつた後もしばらくは、M子は椅子を倒したりしてふざけ、私の反応を試しているようだった。そうでないときには、手を出すとつないでくるので努めて手をつなぐようにした。忙しいのを察してか、初めのうちは私がつなげるようになるまで少し離れたところで待つていたが、やがて、早くつないでと言いたげに私について歩き、すぐそばまで来て手を出して待つようになつた。一度つなぐと自分からはなかなか離そうとしないので、私の片手はふさがることが多くなつた。しっかりと私の手を握つて、M子はどこへでもついてくる。何かをしたいというより、手をつなぐこと自体を味わっているように感じられた。今まではそうしたくとも遠慮していたのである。M子なりに少しずつ自己表出し始めた

ことを私は嬉しく思い、片手をM子に預けてしまうと、私の行動はかなり制約されてしまうが、できる限り意に添うよう努力をしていこうと思った。

M子は登園するとすぐに私と手をつなぎ、そのまま私の傍らで他の子どもたちをしていることをじっと見て過ごすことが多くなった。たまに友だちに誘われても手を離さないことが多く、何かやりたくなくなって自分から手を離しても、終わるとすぐに戻ってくる。

二月生まれのM子は身体が小さいうえ足指の関節が悪く、速く走ることができないので、急ぐときにはしかたなく断わって置いていくのだけでも（抱かれたり背負われたりは好まない）、以前のように部屋の中で待つことをしないで、たいてい必死に後を追ってくるようになった。

防災訓練の折には、一学期とは違って、何度促しても机の下にもぐろうとせず私の手を握って離さなかった。私が誕生会の司会役になった際には、訴えるような目で見つめられて、やむなく手をつないだまままで司会を勤め

た。

M子は自分に気持ちをかけてほしいと私に訴えかけているように思われる。本当はいつでも自分に向いていてほしいのだけれど、たくさんの子どもたちがいて、それが無理なことはM子なりに分かっている。分かっているけれど、でもできるだけ心にかけていてほしいから、そのあかしとして手をつないでいてほしい。たとえ気持ちに他に向いていても、触れ合った手と手から心を通わせることはできるのだから、と。

十月半ばの遠足のときには、何人もの子どもたちが私と手をつなぎたがって団子状になり、とても並んでは歩けなかった。もちろんM子の手はつないでいるのだけれども、寄ってくる子どもたちの心情を思えば、その誰ともつないであげたいし、状況によっては別の子の手をしかり握る必要があつて、M子の手を離さざるをえないことも度々あつた。子どもたちの昼食の仕度を手伝い、いただきますの声をかけ、M子の隣に私の席をつくってから急いで手洗いに行つて戻ると、M子が泣いていた。

大粒の涙を流して声もなく秘そやかに泣いているのを見てびっくりし、気持ちをかけてもらいたい思いがそれほど強いことを改めて思い知らされた。その日、園に帰って子どもたちと別れた後、しばらくするとM子が母親と戻ってきた。何か言いたそうにもじもじして、何も言わずに帰っていった。一生懸命言おうとして多分喉元まで出かかったのに、言えずに飲み込んでしまった言葉は「さようなら」だったのであるうか、小さくなっていく後ろ姿を見送りながら私は思った。

遠足の一週間後の芋ほりのときにも、帰り際にM子は母親とやってきた。ちょっと口ごもって、それから小さいがはつきりした声で「さようなら」と言い、恥ずかしそうに、でも満足気な面もちで帰って行った。よかったと私は思った。一言でも口に出せたということは、壁がほんの少しは越えられたということなのであろうから。この時初めて、私はM子の声を聞いたことになる。それは思いのほか低く、抑揚のない言いかたであった。

幼稚園の生活の中でM子が初めて私にことばで意思を

伝えてきたのは、それより十日ほどたった餅つきの日であった。その日、私はお腹の調子のよくない子の世話にかなり手をとられていた。子どもたちがお餅をついたり丸めたりする手助けも忙しく、気になりながらM子にはあまり手を貸してあげられなかった。園庭から部屋に戻



るとM子が寄ってきた。一瞬何を求めているのか推しはかれず、試しに口元に耳を近づけてみると、ためらいもなく「棒がほしい」ということばが返ってきた。あつけないほどあっさり、M子は壁を乗り越えてしまったと、私はこの時思ったのだった。

この時から、M子は少しずつ話せるようになった。何か言いたそうにしているのを見てとり、口元に耳をよせると、たいていしゃべってくれるようになって、意思の疎通は容易になった。朝、登園するとしばらくは私と手をつないで過ごす、そのうちに何かやりだしたり、子どもたちのそばですることをしていたりもするようになった。ただ、低い声音と一本調子な言い方が相変わらずなのは気になる。それはM子の年齢とそのかわいらしい容姿には似つかわしくない気がして、まだ心の中に越えられない壁を抱えているのであろうことが推察された。

三学期になると、日によっては、M子は朝少し手をつなぐと私から離れ、黙々と何かつくったり、他の子の遊

ぶのを興味深げにながめたり、友だちに誘われて一緒にお店やをしたり、一日の大半をしたいことをして過ごせるようになった（降園後によく遊ぶ友だちが三人いるのだけれど、今までは園ではばらばらだったり誘われてもついて行かなかった）。手洗いにもたまにはひとりで行かれるようになった。

四月になって、今までのクラスがもちあがったところに十三人の新人園児を迎え入れた。

新人の子どもだけでなく三歳からの子にとっても、子どもたちが増えるなど、同じ幼稚園とはいえ環境が変わる。それぞれが安定した気持ちで遊べるようになるまで気をつけてあげたかった。M子は登園が遅いことが多いので、待つてあげて、できるだけ手をつなぐように心がけた。けれども実際にはそれはなかなか難しいことであった。新人の泣いている子や不安気な子たちとも手をつないで、少しは安心させてあげたいと思う。手が空いているときには、片手をM子とつないでも、もう一方で別の子とつなぐことはできた。けれどもいつまでもそうし

てはいられなくて、やむをえず片方の手に二人一緒につなごうとすると、M子の方は嫌がって離してしまっただけ。しっかりと自分だけを受けとめてほしい気持ちは痛いほど分かるけれど、新しい子どもたちとも信頼関係を作りたいと思うと、いつもM子を優先するわけにはいかなかった。

新学期になってから、M子はひとりで手洗いに行かなくなりました。連れていってあげればすませられたのが、終わるまで待つことを求めるようになった。そして五月の初め、M子は初めておもらしをした。着替えをしてあげながら、M子が「お手洗いにいきたい」と言えないほど緊張していたと知って、すまなかつたと思った。と同時に、私は途方にくれてしまった。私があとどれほど努力をしても、子どもが三十三人いれば昨年度と同じにはM子に気を配るわけにはいかないであろう。どうしたらよいのだろうか。

M子は、本当は母親に気持ちをかけてもらいたい、それが無理ならせめて手をつないでもらいたいと切実に思

っているであろう。小さいなりに家庭の事情が分かるから我慢をしてくいて、その思いを私に託したのだと思う。私としてもできるだけそれに応えるべく努力をしてきたつもりであった。でももうこれ以上のことが難しいとなれば、あとは母親に担ってもらうしかないのではないかと考え、私は母親と話をしてみることにした。

五月半ばに話をすると、私がお願するまでもなく、三月いっぱい仕事は辞めましたと母親は言った。残務整理があつたので完全に仕事がなくなったのが三日前です。二日ほど下の子を置いてM子と二人で来ました。が、ずっと手を離さずこんなに大きく手を振って歩きます。こんなことがしたのかと思ひました。"と語ってくれた。私は心から安心するとともに、納得した。ここ二日間、M子は笑いが止まらないといった表情で登園してきていた。私がいっつものように手を差しだし、身体で避けるようにしてまっすぐ水道のところへ行くので、おやっと思つていた矢先だった。

母親が仕事を辞めたというのはやはりM子に大きな変

化をもたらしただろうだった。本当に大丈夫なのかを確かめるべく差しだす私の手はいつも無視された。そして、M子は今度は友だちと手をつなぎたがるようになった。自分から手を出してつないでもらっている。それだけでなく嬉しそうで、誇らしささえ感じられた。初めての友だちとつなぎたいときには私に頼みにくることもあって、ずいぶん積極的になったと感心させられた。園庭にもこだわりなく遊びに行かれるようになったし、友だちの数も増え、対等に遊べるようになった。不安定なときにだけ私と手をつなげば、自分の力で生活できるようになった。

一学期の終わりに母親に聞いたところによると、M子は母に、先生はちゃんと目を見て話してくれる、先生はこうやって手をつないでくれるなどと言っているそうである。忙しいのでついいい加減に相手をしていただけと反省させられています。”と母親は苦笑していた。

二学期になると、M子の声は初めから違っていた。相変わらず口数は少ないが、声はずっと高くなり、気持ち

のこもった話し方をするようになった。積極的に友だちとかかわり、時には相手の世話までやくようになった。あれほど嫌がっていた男の子とも手をつなげるようになって、周囲に向かってどんどん心を開いていくのが感じられた。

十月半ばのこと、私は子どもに頼まれて恐竜の絵を描いていた。背後で「おはようございます」と聞き慣れない声が出て、振り向くとM子が立っていた。不意をつかれてちょっとびっくりしている私には知らん顔で、まるでいつもそうしているというふうにさっさと流しに向かって行った。またもやあっけなく、M子は最後の壁を乗り越えていった。

今、M子は手をつなぐ名人である。友だちとも私も、初めて会った実習生とも、つなぎたい時に実にさりげなく手をつないでいる。

(お茶の水女子大学附属幼稚園)